

# 来週の「売り物」記事はこれ



2014年10月24日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

## ナチス逃亡組織「オデッサ」の謎

### ドイツ戦後史の闇を追う男たち

26日(日)



第二次大戦でドイツが降伏した1945年5月以降、ひとつの噂がささやかれました。自殺したはずのヒトラーが、実は生きている——と。同時にその後、戦犯に指定されたナチス高官の「逃亡説」「生存説」が広まりました。ヒトラーの死は揺るぎのない事実ですが、実際に多くのナチ幹部が身分を偽るなどして、南米などに逃亡していたのです。



「オデッサ」と呼ばれる支援組織の存在がささやかれました。英国の人気作家フレデリック・フォーサイスの小説で知られるようになりましたが、戦犯を支援する「闇の勢力」は完全にフィクションとはいき切れず、今もその解明を目指す検察官やユダヤ人たちがいます。戦後70年を迎えようとするなか、ナチス戦犯の追及が続くドイツ。「オデッサ」の深層に迫ります。

日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待ください。

サラリーマンの街・新橋で30人に聞きました

## どうする10%への消費増税

夕刊2面特集ワイド 27日(月)



来年10月の消費税率10%への引き上げを予定通り実施するのか、延期するのか。「年内判断」を掲げる安倍晋三首相に決断の時が迫っています。安倍首相はアベノミクスの成果を強調しますが、多くの国民の実感とは食い違い、自民党内からすら延期論が公然と上がる状況です。一方で、「国の借金が膨らむ中、増税は避けられない」との主張にも一理あります。国民はどう考えるのでしょうか。東京・新橋で聞いたさまざまな世代の男女30人の声から見えてくるのは——。

## 「女の気持ちをたずねて」 おんなのしんぶん面 27日(月)

おんなのしんぶん



東京都世田谷区の中谷紘子さんは、3年前に亡くなった夫の携帯電話を持ち続けています。やり取りしたメールも残っており、老人ホームでのボランティア活動など多忙な日々を送っている今も充電は忘れずに続けています。



## もう一度食べたい～シイの実 くらしナビ面 25日(土)



懐かしい思い出の味を探し訪ねる「もう一度食べたい」。今回はシイの実です。クヌギの実などに比べると小さく、先がとがって細長い。生のまま口にすると、サツマイモそっくりの味がしました。さらに高さ20mを超える大木から落ちた実を拾い集め、フライパンで煎ってみると、皮がきれいにはじけ、ピーナッツのような味わいに。

## 孫育てのツボ ～ 地域の子とかかわる くらしナビ面 27 日（月）

地域に暮らす他人の孫にかかわり合うことを、最近は「たまご（他孫）活動」と呼ぶそうです。仕事をもつ母親が増え、日中を地域で過ごすママが少なく、独りで育児する「孤育て」が問題になる中、祖父母世代の活躍はそんな親や子どもたちのためにもなります。地域での活動のきっかけ作りを指南します。



## プロ野球日本シリーズ開催 25 日（土）から



プロ野球の今季日本一を決める「SMBC日本シリーズ 2014」は 25 日、阪神甲子園球場で開幕。セ・リーグの阪神とパ・リーグのソフトバンクが対戦します。リーグ 2 位の阪神は 29 年ぶり 2 回目、ソフトバンクは 3 年ぶり 6 回目の日本一を目指します。今季交流戦では 2 勝 2 敗。阪神は鳥谷がソフトバンク戦で打率 5 割 7 分超と相性が良く、逆にソフトバンク打線はセ最多勝のメッセンジャーを 2 度攻略している強みがあります。両球団の日本シリーズ対決は過去 2 度あり、1964 年は南海（ソフトバンクの前身）、2003 年はダイエー（同）がいずれも 4 勝 3 敗で制しています。日本シリーズの熱戦も毎日新聞でお楽しみください。

## 「月刊サッカー」スタート

28 日（火）、毎月第 4 火曜日掲載予定

ワールドカップ（W杯）を終え、アギーレジャパンが始動した男子日本代表、来年の女子 W杯で連覇を目指す女子日本代表。Jリーグも終盤を迎え、サッカーが今、関心を集めています。毎日新聞は毎月第 4 火曜日、国内外で活躍する選手・指導者、海外の注目のチームなど、あらゆる角度からサッカーを特集します。初回の 28 日は U18 女子日本代表の高倉麻子監督インタビューを掲載。日本の女性監督で初めて年代別 W杯優勝を果たした高倉監督に、指導哲学や 2020 年東京五輪に向けた取り組みなどを聞きます。このほかスイス・バーゼルに所属する日本代表 FW、柿谷曜一朗選手のコラム「欧『蹴』日記 バーゼルから」、本紙編集員のコラム「リターンパス」、欧州サッカー情報を紹介する「海外通信」などを掲載します。



## 御嶽山の噴火から 1 カ月

死者 57 人、行方不明者は少なくとも 6 人という戦後の火山災害として最悪の人的被害を出した御嶽山の噴火から、10 月 27 日で 1 カ月を迎えます。毎日新聞社は、噴火直後から御嶽山のふもと、長野県王滝村と木曾町に取材戦線本部を設置し、東京・中部本社を中心に総力を挙げた取材活動を展開し、他紙を圧倒してきました。噴火 1 カ月を機に、この大災害を記録するとともに、残された課題などについて紙面展開していきます。

「特集」（1 ページ）では、噴火のデータや警察、消防、自衛隊による捜索活動について記録するとともに、全国から登山に訪れて犠牲になった人たちの遺族や友人らを、各支局の記者たちが取材しています。

「クローズアップ」では、噴火が残した課題を探ります。登山届を出していない人たちが多く、行方不明者を早急に特定するにはどうすればよかったのか。噴火前に地元の登山ガイドらが感じていた違和感を、噴火を予知するために生かせなかったのか。火山列島に住む日本人にとって、考えていかなければならないことです。

火山がある全国の自治体を対象にした「アンケート」も実施しており、噴石から身を守るシェルターの設置状況などを明らかにします。ふもとの自治体が被った経済的打撃などについても紙面化し、これからも御嶽山と共存していかなければならない地元の人々の姿を描いていきます。